

## 巻頭言

～資料保存も編纂事業の一環～



高澤 裕一  
(金沢大学名誉教授)

今年3月に金沢大学を定年で退き、新しい仕事をはじめたが、その間の経験から資料の保存について思ったことを書き留めておきたい。

まず、退官に際して研究室の私物の書籍や書類を引取ったが、そのうち書類の多さは予想外であった。引取っても収納場所が足りず、大部分は梱包したまま書斎や納戸に積上げてある。

研究関係の資料、教室卒業生関係の資料、教授会等の諸会議資料などに大別されるが、研究資料は二度と採集できないものもあり、また、一昨年になって40年ほど前に書いた論文について資料批判を受けたりしたので、まだ生きた資料である。卒業生関係は就職・留学等での推せんなどもありうるので半現用文書であり、何よりも私と卒業生を結ぶ思い出であって捨てられない。会議等の資料は私にとって非現用文書となったのであるが、金沢大学50年史編纂中とあっては歴史家の1人として捨てるのはためらわれた。たとえば、公文書である議事録が審議の結果だけを記録しているのに対し、私の会議資料にはその論議の内容がメモされていて、史料価値は高いはずだからである。

次に、話をかえるが、4月に入って依頼された仕事の必要から、それまでは流し読み程度にしていた、公文書や古文書の整理保存論または文書館学の論著をまとめて読む機会があった。以下、そこで得た知見についていくらか紹介しよう。

文書館(Archives)の設置は欧米各国では一般的で、ユネスコの『世界文書館名簿』(1975年)には

134カ国の2,500以上が登録されており、公文書も公開されている。日本では戦前は公開はもとより、保存機関も限られていた。戦後になって公文書・私文書の保存運動がはじまり、学会会議も1959年以来、散佚防止、保存、公文書館設置をたびたび勧告し、歴史学界も連絡協議して要望した。その結果、1971年に国立公文書館が設置され、1987年には公文書館法(法律第115号)が成立した。この法律によって、非現用文書は「いったん歴史資料としての評価というチェックを受けなければ廃棄できない」(公務員研修会『地方自治研修』270号、1988年3月)ことになったのである。

ただ、付則に「当分の間、専門職員を置かないことができる」とするなど、精神規定的で、行政側の積極的取り組みもまだ弱い。1996年現在で26都道府県15市1町に文書館が設置されており、時代の流れになっていると言えるが、世界に比べれば日本はこの分野で著しく後進国なのである。

日本の文書館設置のきっかけは、当初から公文書の保存・公開をめざした例もあるが、自治体史編纂で収集した資料の保存問題から発して公文書の保存・利用を計った例も多い。

文書館はその組織体(自治体、会社、団体など)の集合記憶装置であり、行政・経営上の機能および学術文化上の機能を持つものである。その公開によって、国民共有の文化遺産とも意義づけられよう。行政に都合の悪い証拠までも金をかけて保存することをためらう役人根性が文書館設立を遅らせているという指摘もあるが、文書館は非現用文書を取扱うのであり、現今の情報公開論議とは別のことである。また図書館、博物館の機能と混同する向きもあるが対象資料がちがひ、取扱いの理論や技法もちがうから、司書、学芸員と異なる専門職員(Archivist)を置く必要がある。

(次のページへ)

## 巻頭言(つづき)

(前ページから)

大学独自の文書館については、東京大学百年史編纂室が1980年に調査した結果、26ヵ国181大学の回答によって、設置率は80%であり、そこでは大学運営・教育関係、大学の刊行物全般、大学の歴史を示す記章、旗、制服、記念品等や写真、フィルム、テープも系統的に収集し、さらに教職員や学生の私蔵文書の寄贈も受けて、プライバシーに関するもの以外は大学内外に閲覧を認めているという(『東京大学史紀要』4号、1983年、その他)。

さて、最初に述べた私の書類の処置は今後を考えるとして、他の退官あるいは卒業した人の書類はどうなったのであろうか。いや、それよりも大学の書類はどう保存され、どう廃棄されているのであろうか。私

の経験の一つを言えば、先任の下出積與先生(本誌第5号巻頭言執筆者、本年5月逝去)が1968年に転出される時に、旧法文学部木造校舎以来撮りためた写真を学生係に遺しておかれたのであるが、角間へ移転後の1992年に文学部白書を作る際には誰も所在を知らず、探すあてもなかった。保管の責任が明確で継続的でない限り、人代り、所移ればこのような仕儀になるのである。目下執筆中、これから執筆という時期に気の早い話と思われるかも知れないが、編纂室、各部局史担当者とともに、刊行後の跡仕抹も編纂事業の一環と心得られて、後世のため、資料の保存に十全の配慮を払っていただきたいし、今後も、大学だからこそ社会に率先して、公文書保存に範を示してほしいと思う。

### 金大秘宝探検隊

その伍

「石川県師範学校創立50周年記念絵葉書」

～石川県師範学校創立50周年記念絵葉書を手～

金沢大学教育学部の前身校の一つ、石川県師範学校は、明治期の学校制度の確立による小学校教員の養成を図るため、明治7年11月に設立されました。創立当初は男子師範学校のみでしたが、明治8年5月に幼児教育に携わる女性教員を養成するために女子師範学校も加わりました。

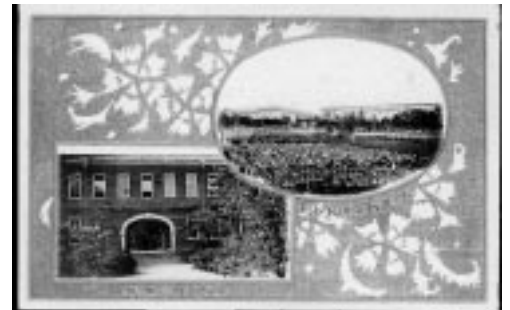
ここに掲載した絵葉書は、石川県師範学校同窓会が創立50周年を記念して作ったもので、大正13年10月18日、石川県師範学校創立50周年記念式典が挙行されたとき来賓、職員や当日出席の同窓会員に贈呈されました。この絵葉書のことはこれまでたびたび本などで紹介されてきたのですが、その実物を見る機会がありませんでした。このたび50年史編纂室室員が偶然にも古書店で入手することに成功したものです。

記念絵葉書が入っていた封筒



白山連邦に手取川を配し、その中間へ、母校前館及由緒ある傘松の写真を挿入したもの

撫子模様の地へ母校全景並に広坂校舎前景の写真二廓を挿入したもの



\* 写真の説明は「石川県師範教育史」より転載

## 50年史編纂委員会委員 から

50年史編纂委員会委員 中野 節子  
(文学部助教授)

### 金沢城址の発掘

今となつては教官でも、そして学生の殆どがそのキャンパスを知らない、もとの丸の内の金沢大学。あの頃は、世界でも数少ない城址を校地とする大学としてその雰囲気は有名で、春になれば学内の桜並木はもちろん、石川門を出ると観光客の雑踏の中からも百間堀の桜並木が前田藩当時を思い起こさせるように咲き競っていた。

優雅な環境ではあったが、悩みは学内の工事を行う際は必ず文化遺産(地下も地上をも含めて)の破壊を伴うということであった。文化遺産の保存上、建造物をこれ以上増やせないということが、角間移転の要因ともなったのである。

1967年12月26日付の北国新聞には「無届、教育学部前の道路工事」という見出しで、大学側の配慮のない文化財破壊を批判している。実はこれ以前の1965年には、金沢城址学術調査委員会が学内教官をメンバーに結成され、金沢城の歴史、城郭建築、城内の動植物などに関する調査が開始されていた(報告書『金沢城』1966年刊)。上記の新聞記事に先立って、委員会では工事関連場所のボーリング調査を行うなどの処置を採っていたが、委員会自身がそれを十分なものと捉えていなかった。

1968年から城内の本格的な発掘作業が、文化庁へ発掘調査の許可を申請した上で、井上鋭夫教授(故人、当時法文学部所属)を中心に開始された(当時、金沢城址は文化財指定外)。調査は本丸址(当時植物園)二の丸(法経文書舎前)鶴の丸(教育学部前)などが中心で、発掘は68年度から74年度迄行われた。この間本丸址で近世初期の礎石址が(前田氏時代以前のものかと推定されている)二の丸址で能舞台址や台所址付近からの地下貯蔵庫が、初期の辰巳上水の木管が(城内の使用水として小立野方向から百間堀で逆サイホン式に城内へ汲み上げたものとして有名)発見されるなど大きな成果を残した(報告書『金沢城址の発掘』1969年刊ほか)。戦前、城内は第九師団が使用し、本部建物のほか演習場や弾薬庫が設けられるなどの過程で、かなりの部分で地層が攪乱されていた。そのため、発掘中の諸判定には様々な困難が伴ったが、石川県教育委員会、学習院大学、松任農高、その他専門家の協力も得て、貴重な調査結果を得ることができたのである。

波に北斗七星を配し、運動場よりみた寄  
宿舍全景の写真を挿入したもの



淡橙色の地に母校の徽章を白にぬ  
き出し、校歌の歌詞歌曲を入れたもの



母校の昔を偲ぶ明倫堂及経武館の額の  
写真をおき、母校の沿革及卒業生男女別  
数を刷出したもの



《参考文献》  
『石川県師範教育史』  
『北国新聞』大正13年10月18日  
『北国新聞』大正13年10月20日

また、創立50周年記念行事として同校附属学校の児童らによる学芸会、故人の追悼式などが行われました。当時の『北国新聞』によると学芸会は大変な盛況だったらしく、児童の唱歌、童謡、舞踊に会場を埋めつくした人達から終始嵐のような喝采が沸き起こったと伝えています。

### 50年史編纂室からのお礼とお願い

編纂室開室以来、本学職員の方々から貴重な資料をご提供いただきありがとうございます。

これからもどのようなものでも結構ですので、いろいろな情報なども含めて、ご提供くださいますようお願いいたします。

金沢大学50年史編纂室 〒920-1192 金沢市角間町  
TEL 076 (264) 5284・5288  
FAX 076 (234) 4013  
電子メール(E-mail)=yukari@kenroku.ipc.kanazawa-u.ac.jp

## 北国新聞掲載記事のマイクロフィルム検索開始

50年史編纂室では、本学図書館が所蔵する北国新聞マイクロフィルム版の調査をこの8月から開始しました。

この調査は、50年史の執筆に必要な諸資料の収集や本学年表の作成などに利用するもので、巻数にすると245巻です。検索内容は本学関連記事や教育制度等に関するもの（大学制度、社会の動きと金沢大学、我が国教育制度など）を対象にしています。

新聞記事は歴史的叙述という観点では資料性に限界もありますが、新しい出来事や資料蒐集の手がかりを得るためには大変貴重なものです。

例えば、次の写真は、昭和31年1月に金沢大学とアメリカのペンシルヴァニア大学との間で、図書交換、教官や学生、卒業生の交換留学などの文化交流を行うことが確認されましたが、この年の8月14日にペン大から『ペン大便秘』が送られてきた出来事が8月16日付『北国新聞』に掲載されたものです。

このような記事は、本学とペン大との具体的な交流の内容を知る一つの手がかりになるものです。編纂室では新しい出来事を知るために調査の年内完了を目指しています。



## 50年史編纂室

## 日誌抄録

(平成10年7月～平成10年8月)

## ◀ 年月日 ▶

10.7.1  
7.1～16  
7.8  
7.16  
7.21  
7.22  
8.1  
8.2～3  
8.3  
8.25  
8.26  
8.28

## ◀ 内 容 ▶

金沢高等師範学校関係資料について浅井正友氏(本学名誉教授)と面談(江森委員、谷本室員)  
戦後学生関係年表を作成  
第16回編集会議開催  
実録石川県史(1868～1989)により本学関係年表を作成  
向井覺氏(四高理甲：昭和17年3月卒)から、資料提供  
第17回編集会議開催  
本学関係事項の新聞記事(マイクロフィルム)検索開始  
第3回夏期教育セミナーに参加(報告)、資料収集(谷本室員)  
谷喬氏(旧制高等学校記念館資料研究委員)から四高関係資料提供受入  
「本学学生就職関係資料」のコピー  
木戸睦彦氏、岡田一男氏(いずれも本学名誉教授)と面談(江森委員、谷本室員)  
「金沢城学術調査委員会関係資料」のコピー

## お詫びと訂正

前号以前の記事の中に誤った記載がございましたので、お詫び申しあげるとともに、別紙にて正誤表を添付いたします。今後は、このような不手際のないよう、最善の努力をいたします。